# 源氏物語講義

花宴

花宴

此巻源の年立朔月より紅葉賀の次の年の春へ、源氏十九歳宰相中将正三位也とあるハ、例の玉小櫛の説より改め侍て、二十歳と改め侍、

段落

此巻ハ、一大段三小段とし、一小段より於てハ南殿の桜の宴のありさま、源氏朧月夜の天より逢のふことを叙し、二小段より於てハ源氏大臣まして遊ひのふよ、弁中将の人〻参りあひて、高欄よりゐて、物の音あハせのふ状を叙し、三小段ハ右大臣家の弓結の日の宴

## 花宴の巻　凡一大段三小段十二節

此巻ハ。源氏二十歳の春のことゝ。巻の名ハ。詞をとりて付たり。冒頭より。後世ハ花といへバ桜のことゝなれり。桜のえんを花のえんといひ。花鳥より。何を以て名とせる。但巻の初より。南殿の桜の宴せさせのふとありて。奥の二条のおとゝの宴のふとあり。花の花の宴しのふとあれバ。そこよつきて巻の名を花の宴といへるなるやと。笑侍ぬ。古来花の宴とハ。桜を翫事をいひ。ならハし侍るゆへ。花ハ禁中の事也。これを私の家の宴なれば。殿南殿の桜の宴をもて名目とせりと心得べきなりとあり。又細流より。唐土より花といへバ牡丹。日本より花といふハ桜也。桜の宴。花の宴差別あるべきゆへとあり。小櫛の説のめく。此所ハ。桜の宴のことを。須磨。蓬生。をとめの巻などより。そこらハ。花の宴と又云へり。按るに。新釈より。桜花をたゞ花とゞのりハ古へをいへゝ。とて。古今集より。。何よりも。桜花とあることをいそれたれど。古今の比ハ。花とも。あるべし。此式部の比ハ。花や花と

のふの宴なくさの源寝殿の戸口よりて、この朧月夜の天をもとめのひて、みそのよりあの問答あるさ間、然して源ハ南面の桜乃宴の夜、とは花の宴の宴のまぎれよ、朧月夜をえのまるぞつひよ須磨のほうろひのたしとふなれるとをまづ伏案よりあしたる文法、

**眼目**

は巻ハ月と花とを眼目と志られば まず冒頭よりなんでんの桜の宴とあるより、一小段の第二節よりろく、えんといふ義第六節

いくバ桜をいふことくなるべし。

は巻を須磨明石の巻れ伏案して源の須磨のほうろひも。第ハ朧月夜の天のことをおこるをたるれば。この巻ハ朧月夜の天を与とかきて。源氏の天れ為きみさのうのさま然ら別べしうあらいし。さて物ハ盛衰れあるならひまて。月よりもやはのくり。花よりも嵐をるどのあるといふことさざのさより。月花を眼目とし、いとなるやうあやなしてかれたるものくめし。光源氏の天の盛衰をたしめて伏案とつくべし。

伊勢云ハ注よ俊成々の六百番歌合の判詞よ。源式部ハ。歌よみのほどよりも物のく巻ハ殊勝の上ハ。宴の巻ハとよ艶なるものえとあるを引て。は巻れ殊よ優れたるやうよいそれたるハんなのべし。

艶なるとふ花やうよかれ為れば左もあるべし。歌とえとのけちめをいのぐあらんと。うとれの巻々も。はそのとれさまようて。えんよりもあそれよりもあやどられたるれだ。いづれをこしよりそれ為べくもあらべ。俊成々もこしよ艶なるものなりとそかれ為也。殊よ優也たるとふののふぬを





よ扇ハ桜の三重ぞさね三小段の第一節三花の花のえんしのよ花ざのり。第二節よおやどの花しちべて。とふ義第三節よさくらのかちのきれ伊勢ほ「花のよほひもけおされて」などあり、又月とふとも、一小段の第三節一月とあるのうさ「出て」おぼろ月よよ似るものぞなきと源のあるへ月の朧なるげるらぬ第六節よ賞める月ハあるて」源のあるあり行けの月ハゆくへ三小段の第四節よほのえし月のあけやみやうとも云ふ。又月書よいくるぞめく。は巻を月と花と眼目とし。たれど。ふをまとして。月を副へあるハ巻れ名の花宴とふよりの。源氏をと考るなりさて。源と朧月夜とのことハ巻をて。おこるしとなるぞ。桜の巻れ雷鳴れをよりよ事あらハれて須磨よさきら。へのひしを。祓の日れ風まて雷鳴の日。その罪をのぞうれて。ハ。の秋の月よ巻雲れて。ひきらあよ新ゆりのふさ海ハ行女の用さといひ。海名といひ。あるぐさいとぬへとふ屋し。

きさらぎのたちのあのまりなんでんの桜れえ

んせさを折ふ后きさきの内つぼ。左右まして。

ようのぼりたまふ。弘徽殿の女御。中宮のか

くて。后きさきをおふさる。をるとふしどよやはこのしび

おぼせどものえりまふえをぐし孫をでまあり

ゆるして」とある源の宰相、又紙月夜の夜の
あるより引きうつの月なき
空に」などある、皆眼
目なるべし。さて、一小段の
第二節よりまづこの夜
をひろうしるべし。
とあるハ、全篇
の眼目なり。

**服應**

はるの照応ハまづ一小
段の第一節よりなる
おくゝしぐちなる
ろめる」とありて第二
節よりうゝしも夜よ
みやらびくゞとなる
しのくゝる」とうけ
たるハ照応、又因ふ
の為なるの如く大なる
ふるの夜のくをみま

冒頭ハ、まづ花の宴せさせたまふと云ふ。○
きさらぎ、二月の異名。「ありあはり」二月二十余日。○「なんでん」
南殿ハ紫宸殿のこと。○「右ゝ」南面の東西。○「左右ゝ」南面の東西。まゐるハ左ゝて来る。右ハ右ゝて西
より来る。「なるべし」さて、花宴ハ延喜の例を引て清涼殿より
らせ給てとんぬべし。「うゝ」とあるハさることなるべし。詩賦ハ南殿
にて。舞楽以下ハ清涼殿にて。「あるべし」の「べ」ハ「のみ」。
を、えまぐゝしのそそ」を、「のみ」。

日いとよくさかれて。をのけしき。をもの
んちよげなるよ。親王達。みこ。上達部。たちめうえ
じめて。その夜のいでたちもあん孫ハりてふを
はくるをもふさん。源氏。宰相の中将。善とい
ふゝ孫をれをとのゝふこゝさえ。例なるべし。風ハ人をよ
ふ。きんの人よ
とれり。つぎに昭申ハ。人のめうりしるたぐ



しゝば」とあるハ、お系
の夜の夜より花つぼハ
おぼけなきさんをうら
ゝしゝおもしてめで
たくえ」ゝをを」と
あるゝしよ照応ゝ又
一小段の第四節よりま
づのれるうのあり
さまのこゝろうおく
まりたるをや」とあ
るハ、下の三小段の第
四節よりまづ夜つぼ
ゝうをおぼしそ
ちる」とあるよ照応
なる文法なり。此外
もあるハそのと
ころどころよ推て
いふべし。

**小ノ第二節**

とくのへさせのゝり」

ならばおぼゆべこのゝめれどいとめやをくもて志
づめてこゝろづのひなどもの〳〵しくをぐれ
たりさて〳〵の人ぐをこゝれおくゝしぐちよをな
おろかめるおほのうゝ地位五位六下。女人をまして。み
うと云ふの。陪ざえこのゝこくをぐれておを
師云ハ、此の誤ならまし。
しまゝかるかくるやもむどあるき人おほく
地位の女人のこと
ものゝ孫ふこゝろなるよたづのゝくそたるぞ
るとくゝもをたなき夜よゝちいげる孫を
フッガウ
したるくゝて。やをきこゝるれどくゝ
げなりやゝ老たるをのせどもれ。容体

楽の上手をえらび
のひしゝ○やうく」
俗ダンくニ之○ある
のうくひをさへづる」
春鶯囀之又天長宝寿
楽ともいふ楽の名也
○源氏の御おほえ乃
宴」御の字ゆかりなま
用ゐるハ当時のつかひ
ひざまずて源氏の
お気の御気どらふ
事之以下おなじ○春
宴のざし」たまはせ」
のざしハ花など冠に
さしをいふ春宴ハ朱
雀院之源の舞を切
りに不望しなる也○
袖のへ」舞ひの袖
を翻くし之○ひとを
れ」一折之ひとまひ

やしくやつれてれいなれたるもあはれに。
帝の之さまざま御覧ずるなんをかしかりける。
一小段の第一節之。南殿の桜の宴に。人々詩を賦し。
文をはくまき。才学をあらそふ物之。さて文中におの
づから源氏秀才なるさま例志めせり○その
乃の」文学の道之。文学にたづさはる人々也○たんゐ
ん」探韻之。韻字のうち一字をさぐりえて。春韻にて
詩を賦に之○さん志やうちく」じやう春といふも
卜」春ハ真の韻之。韻字を探りて名をよしとやう之。宮姓名
何くの字をあするとあるのハ。勅によりて探るゆゑ之○
人」のめうつしもたゞならび」次に所中務もさまでハ源
にあとりのふぬさまぞめうつしハ目移之。人々第一に源に目
を付て次に目を移して所中務をみる意之○いとめやすく」人
ハ心おく〳〵おもへど中務ハおぞらぬさま之○こゝろづかひ」詞つ
かひ之○ものゝしく」俗モツトモラシク之○まてのくぐ」心
源氏所中務の外のくぐ之○それぼろめる」臆して興
さめかほにみゆる之、俗にも一座志らけてみゆるなど以
ふ志らけとおなじ之○かゝるうさにやむごとなき人



なといふにおなじ、
寿鶯囀の楽ハ大曲
にて昔ハ十四帖あれ
バ末の一畳を舞ひな
ひしにや、春宴せ
め給へバ舞のすふ也
○うらめしき也云」
左大臣殿ハ葵上と
源との仲中のむつま
しからぬをつねに
恨ミのすへど今ハうち
まぎれて感涙をな
がしたまふ也○いづら
おそし」所中将ハ紅葉
の賀の時源の相手なる
れバ何とておそきぞ
と勅諚ある也○里
うくも之ん」舞の名
也今ハ断絶也とぞ○
これハ今まさしう

文学の乃に貴き人也○やむごとなき」探韻のたまはる
時の進退ハ。容易なるとなれど。心のさえの拙きを思ふ
からに。苦しげなる有様の面にあらはれてみゆるを之
○地下ん馴れたるもあはれ」老人の博士どもハ。地下の
ことにて。もの馴れたれど。昔しき有様がくどくも
なる衣にやつしゝど帝の御覧ある様之。
などさへ御らんずるにもいとめでたく興させたま
へり。やうやう入日になるほどに。はるのうぐ
ひすさへづるといふ舞いとおもしろくみゆ
るに。源氏の御紅葉の賀のをりおぼし出
られて。春宮かざしたまはせて。せちにせ
めのたまはするに。のがれがたくて。立ちて
のどかに袖かへすところをひとをれ気色ばか

ちもぐ〜して」源氏よりハ金沢よ舞ゐるゑうちもぐ〜ハ時刻を返すとゑ〜〇内ぞめりて」録をのふゑ、天子より内衣を申ねるゑ〜〇ゑ〜よけちめゐゑ色ゑび」夜よ入りて格別よ

よ〜あ〜ゐゑ色ぬをゑ〜〇ふゑ〜ちどかうぞゐるゐ」詩の披講ゐるで、花ゐよ、文臺を内前よ立て文人どゞ階下よ進て講頌をゐゑ、とあり〇〜ごとよまぞ〜の〜ちゐ」毎句秀逸ゐる放講師ゐ感ドの〜〜ゑ〇玄まの女ほれ〜ゐ」ゐ玄ゑよ、何とてかぞあり

りまひのゑ〜ゐよ。似べきものなくゑゆ。左の（左大弁）おとぞ。うらめ〜さゐゐれて涙おとゝめふ。

内の陪中ねいづらおそ〜とあれば。（祈）（花）（苑）うくゐとえん

といふ舞をぞこれハ今ちこ〜うちちぐ〜て。

かゝ涙とゆや。とんづのひやちけんぷと面白けれぞ。

内ぞのふりて。（アラン）いとめづら〜きとよ人おゆゑ。

ふんぶ（上達部）ちめゐゑれゑぶれてまひのゑ〜ど。我よ入

てふ。とよけちめゐゑ色び。ふゑなどかうぞゐる

ゐゐ。源氏の文（詩）ほをぶ。（講師）かう〜ゐゐえよみやら

び。〜ぐゐよぞ〜いゐのゐる。ちゐ（博士）せどゐけんゐゐ



めでたき源氏を、弘徽殿ハまゐ〜みのふぞとあや〜みのふゑ〜〇引おかう思ふゐ云」ゐんよ系ぞかやうよ思ふゐ憂〜ゑ〜〇大のゑ〜よの文」ゐの姿ハ源をいゑ、ゑふゐつぼふなゑゑとゑ通りの関係ゐき多まて源のゐの姿をえゑ〜ゑやうゐら弟ほどゐゑゑゐおのれマシヤウカイ、ゑゐおのれハせ〜ゑとえ式ゐハゐの縁語まて弟といひまゑ弟の縁語まておくとい

ふゐり〇内〜のうちゐをけんゑと」

源氏物語講義　花乃えん

いゑ〜ゑうおゐ〜。かうやうゐをゐよゐ。まづ源ゑ

この文をひ〇〇〇〇りまゐへぶ。ゑのどゐいのでゐ

おゐのよおぼされん。中宮（弟宮）ゐ内めゐとゆゐまゐ法（粗略）

けて書ゐれ女御ゐ。あるごちに。（源氏）ゐ〜〜弱ふら（弘徽殿）

んゐあや〜うゐよ（弟宮）のかう思ふゐゑゐろうゐと

ぞ。ゑ川おうおぼ〜ゐへされける。

大のゑよゐのゐぞゐ弱ゑまゐ〜ゐぶ法ゆゐ（弟）

んのおのれまゐ〜やハ。（池）ゐんのうちなりゐんゑ

とゐのでゐりまけん。我いゑ〜ふけてゐんを（花宴）

ゐてゐる」（一小松）小段の才二節ゑ。弟ゐれタゐゐ乃内ゐ。陪中ねゐ柳花苑を舞ひのふ我を

かやうの歌ハ巻のみころれうちに見ひのべるならんを、いあでられしさらんと其子地より疑ひていへるん、

不ノ第三節

「月いとあかう」廿日なれバ更て月の出る之○「人そぐしづく」「月のよきけしきを見えそておこさ之○「上の人々」御上にれるのくづん○おくらふべきとぐち」王命婦お局気ものいひ入る戸口之○「なほあらじ」体をまいへるん、此まくまそふあられぬを、俗キガスマナクテなど

叙せり。此下の大きさの為の起こりをみましつぶとある巻の歌ハ。紅葉賀の巻。一小段の第二節に「巻は例ハおほけなきこころなからましかば。まして めでたくこえましとおぼせ」とある文脈をうけたるまで照応なり。

上達部おのおのあがれ后春宮かへらせ給ひぬれバ。のどやかになりぬるに。月いとあかうさしいでてをかしきを。源氏の君酔ひ心ちに。見すぐしがたくおぼえ給ひけれバ。うへの人々もうちやすみて。かやうにおもひかけぬほどに。もしさりぬべきひまもやあると。藤つぼわたりをわりなう忍びてうかがひありけど。かたらふべきとぐちもさ



いふまおもし○「三のくち」旧注云ほそどのへ出る所に戸三あり、南の第三にあたるくちさしたる戸之○「くるゝど」枢戸之○「かやうにて云々」かやうの油断より男女の過ハ出来るものぞと、付のまへなおら源の、のぞきつゝおふ之、榊巻までおそくまうん付られのるふ伏案之○「おぼろ月ににる」引歌之、新古今にてりもせずくもりもはてぬ春の夜の朧月よにしくものぞなき」此歌をよるものぞなきといひかへたる此歌を吟

してけれバ。うちなげきて。なほあらじに。弘徽殿のほそどのに立よりたまへれバ。三のくちあきたり。女御ハうへの御つぼねにやがてまうのぼりにけれバ。人ずくなゝるけはひなり。おくのくるゝどもあきて。人おともせず。かやうにて世の中のあやまちハするぞかしとおもひてやをらのぼりてのぞき給ふ。人ハみなねたるべし。いとわかうをかしげなる声の。なべての人とは聞えぬ「おぼろ月夜ににる物ぞな

じたるえ○こそたそ」見ハ誰ぞえ○ふのきよの音」女の朧月夜ゑ」今ゞたるをうけておぼろけといふえ、又入月といふハ、上ゑ月いとあのうさし出て」とある首尾なれど、入月ハさやのなまぶおぼろけならぬといえんようせえ、さハ深夜よかくゆひもかけゞあひゑるハ、おぼろけならぬちぎりゑてハなきこうとえ、おぼろけならぬハ、俗ナミタイテイデハナイとのきえ○まろハうなくゑゆゑきれたれど」旧注ゑ源氏のき。とうちぶ〜してこるゑざはゑくるものの。いとうれ〜くてぷと袖をとらへゑまふ。女おそろし〜とおゆくるけ〜きゑて。あるむくつけ。女河たそとのゑまへど。なゑとのうとまゑきさとて。

源ふのきよ夜乃衣を志るゑ入月のおぼろけなしぬ契とぞ思ふとてやをらいゞきおろしてとふおし〜て。あさまゑ〜きゑよあきれさるさはいとたゆすゑをの〜げゑり。ゑるく〜ゑよ人のとのゑへど。源河まろハうなへよゆ



自称ゑえあらびハ人よゆゑされたゑまぶとふ時よとりて計略よのゑふえ○なきけるくこゑ〜〜」無情ニ剛々シク〜女の用ゑえ○祓ゑくゆゆけバ」上の才其ゑ祓いこうふけて」とある照ゑ○心あたゞ〜」心ハ周章をゑえ○ゞはゑのり志ゑ」粋といふ河味あり、先刻より名のりゑ」といつゞゑのらざるゆゑよ今ゑまゑせめのふ〜ゑまゑゑはといふ河ハ義あより名のりゑへと源ゞのたゑまへ〜ゑまのるゑれゑめ〜よせゑりとゑ。たそでうゑの源のらん。たゞゑのびてこそとの源ふこゑ源ゑよ源ゑゑりけりとゆゑゑだめて。いゑゑくのゑなゑけゑくこゑゞ〜うはゑ色ゞとおりへゑ。源ゑひゑちや御ゑらゞりゑん。ゆゑゑさんゑふくちをゑ〜きゑよ。女ゑとのうゑゑをゑゞきてつゑきんゑもゑらぬゑゑゞ〜。らゑたゑ〜とみゑよ。祓ゑくゆゆけバ。あふたゞ〜。女ハまして。ゑゞよ思ひ乱ゑたゑけ〜きゑり。源河なゑ

主をふくめたり、よく味よげ。○うき身世よの命　主は分れおぼゆる死ぶるら、天ハ表てマアそのホまでハ訪のふまーと思ふべ、名ハなのるもの、とえ、その原ハ墓場のことえ○いづ身ぞとの命どこぞといひてその命の命の名をとけて見ぬるあひてよハ篠のハらよ風ゴギ〻ト吹カウガマアとえ命のやとりハ、上の消なるべをうけていひ、風ハ右大臣家よりせて、大臣のまへもろづらハーく、人〻いひ強くちるべーとえ○

ほるのりしのへ、いのでのきこゆべきか。（向後ト通ビ）（きこと）（今夜ダ）
やこたなんとハ。さりとも（桂月ホン）おぼされどるどの孫へバ。
（脱）うき身世よやゴて消なば見ぬても其の京
をバとそんじとやと思ふ。といふさ海。えん（艶）よなまめ
きたり。（源何）ことりや。（イヒソコナヒタル）罗亜ことのへたるもの（羽）あれとそ。
（源）いづ身ぞと雲のやどりをとこのむまよこざく
がハらよ風もてそふけ。ろづらハーう（源羽メンドウニ）おぼをこ
とるらべハ。なるよこのつくまん。（名をえ）もーすこのひのふ
（名のりのりぬのこと　ーーこアハ　ーーこ）（源をダマシテ又とあいドとて）
あ。とも。えいとあへぞ。（ニアハ　ーーこ）（仏徴殿のくくえ）おきさろぎ。（仏徴殿の上の）
（局え）ぱつぼねよまゐ
ゐりちがふけーきども。ちげくまよ



ちげくまよへバ」弘徴殿の内迎へのくく
ちきりよ立強けど
○ちるーよとり
うへて」源の西ゑまと
て、源と徴月と扇を
取替てさて源ハ立
さりるえ。

「小ノ末四節」
きりつぼ」源の氏曹司
え○へ〻多くさふ
らひて」忍宴の後物な
れぞへく多く伺候
たるえ○かくるを
ゑ〻」源の名物陽りの
つるを控強ものなき
所男ありきぞえ○
つきぞろひ」目ひき
袖ひきーてつきあ
ふえ○ぞよよ

つぶいとゼヒナクなくて。あふぎぞこのりを志るー
よとりのへて出給ひぬ。一小段の末三節え。南
月夜の夜よふと逢のふさまを叙せり。けふ徴月
夜の夜れ。容易ハ思ひのふ孫もぬハ。源のふるまひを卒
名のりのふぬなるぞー。きるつぼ相壷まハ。へ〻おほ
くさふらひて。おどろきたるもあまバ。かく
る様さるものゆみなき所志のびのりきこの
れ。とつきぞろひつ。そらねをぞーあへる。
（源何曹司えん）いりのひてふーのへまどぬいられびをか
ーありつる人（脱の）のさ海ある。（仏徴殿）女御の所おとう（妹）
とだちまそハあらめ。ぞよよなれぬハ。

なれぬ」よハ男女の中
心未だ別ぬ○
五六の夫人」朧月ハ六夫人○そちの宮」源
のき弟、帥宮の北方
ハ右大臣の女三夫人
○所中なる」所中なる
のかの方ハ右大臣の
女四夫人○なるの
源ハ半信半疑なり、
あまりよ女の男な
れざるもの」ゆあやし
みのふ○たづぬん
程もまぎらハし」五
夫人やハ六夫人やと
まぎらハしくおぼ
つかるもの」とん○いの
なれバとのよそに
ぎさ海を」源ハ

五六の夫人ならんの。そちの宮北かのう。所中なるの心のもくまぬ四の夫人などこそよ。とやしの。なるあくそれならまし。おぶいまを。こをこの方夫人なら海し。六夫人朱雀院ハ妻宮よりあてま。つらんとんぎ。のくるを。いとほしくキノドクニモ。もあるべいなれ。ろづ。メンドウニ。ら。うたづん程もま。ぎらハし。さんそ。女の方夫人なんとハ思ひもぬ気色。なりつる後。いなれどとあるそに爲さ。さ海を。ゆ。しくべなりぬらん。などよろづ。海のおもふるんのとまるなるべ。このやうな



いのなれバ、この女
ハかの中なるのに女を
のようそに中つぎを
も教へざるもけんと思
ひ、当時の習俗も、
男よりもひ。女の方よ
てハ聖教男のもとよ
り女の来るをよろこ
ぶ、かよ女なるど取
のハ、なるよりを教
へぬを源ハあやしみ
のふ○まりこの
こう」旧注よハ葵
上の方とする説も
あれど、花なるとふ説も
とよ為つぼの方と、
とのをよろしとし、

小ノ才五節

「貝ハ後宴」名宴の
後宴、源ハそのよま

るよ法けて。まぶいあれ思ふいいれ。ありさ
海の。こよなう思ひくらべられのふ」一小段の才四節と。源氏曹司の相違よ
あう思ひくらべられのふ。ありあくまりあるもやとなりぬ
ありて。朧月夜の夫人のとなる思ひやりのふさ海のとあるふ。下の
氏ふ夫人まりのあれ思ふりのありさ海の」とあるふ。下の
三小段の才四節よまづ花つぼ思ふり紙
おぼし知らる」とあるよ思ふ。たる文法なり。
海宴のことあ
ありてまぎれくらしのひつさ
うの琴つこのうまりまのふ。昨日ハとよりも
なまめこ。しろおし。花つぼハ晴よ
まうのぼり移ひまり。このあ的出やもぬ
上局へまうのぼる
ゆん。とんもそらまそ。思ひいらぬくまなきよ

源氏物語講義　花の宴　九

まぎれてかへるのみなり○昨日は「ことよりもなり」昨日の花宴よりもおもしろし」と也○そのあたり云々」其あたりは朧月夜の君のすみか猶又右大臣の女達の手紙りのひましく退出しけるならん」と路のほど」良清惟光をつけてうかゞ」なり○北の陣より○かねてかくれたちて」目立たぬ中重の小陣之○北の陣まの車之○四位少将右中弁」二人共右大臣の公達にて弘徽殿の兄弟之○けしうはあらぬ」わるくはなきと也○いかにして云」五六の君は何れ

清
きよ。惟光をつけてうかゞはせけれバ。良清惟光詞 御まへよりまかで給ひけるほどに。たゞ今北の陣より。かねてよりかくれたちて侍りつる車ども出るに。御かたがたの宗族之さと人侍りける中に。四位少将。右中弁。なといそぎいでゝ。おくりし侍りつるや。弘徽殿の退出之御あかれならんとみ給ひつる。けしうハあらぬけはひどもしるくて車三つばかり侍りつと聞ゆるにも。むねうちつぶれ給ふ。源心いかにしていづれと志らん。父右大臣おとゞなど聞てことごとしうもてなされんも。いかにぞや。女之まだ人のありさまよく見



とも知りがたしと也○ことごとしうもてなされん」右大臣の方にて源を聟に取らんなどゝありてハとゞ○ながめふし給へり」ながめハ俗シンツコ之なり又長歎息之源さまざまに思案して心底より歎息してふし給へるなり

一小ノ第六節

日ごろになれば」日頃とは二三日以上をいふ源ハ二三日内裏に居給ひて紫上の所へは御出の事なれば紫上ハ心屈してやあらんと也○かのしるしの扇」先夜朧月夜と取替給へる扇なり○さくらの三重がさね

さだめぬほどハ。わづらはしかるべし。さりとてしらであらんいとくちをしかるべければ。いかにせましとおぼしわづらひて。つくづくとながめふし給へり。
一小段の第五節之。源ハ良清惟光に命じて女を窺ひたるなり。さて北の陣より退出したる車の中にありとの報あり。その車の主を尋ねて知らんと欲すれども。いかにせんとてなやみ給ふなり。

姫君いかにつれづれならん。日ごろになればくしてやあらんと。らうたくおぼしやる。かのしるしの扇ハ。◎◎◎さくらの三へがさねにて。濃きかたにかすめる

さね」檜扇の表方のうへ三重づゝ桜色の薄やうにて包みて色々の糸にてとぢたる之、面白裡蘇芳之ト云○世にしらぬの歌」世にしらぬハ世でしられぬ之。俗にけしからぬなどゝいふこと之」空ハそけしからぬ心ちぞのもるぞママ有明の月のゆくゑを空にまがへためるしてあればと之○かきつけて」源此歌を扇にかき付て置給ふ之

二小ノ第一節

らうらうじき」俗ナダメンと之○らうらうしき心ばへ」俗コウシヤラシキ心ダテと之○

める月をかきて。水にうつしたるこゝろばへ。めなれ
たれど。ゆゑなつかしうもてならしたり。草
の原をぞといひしさまのみ。こゝろにかゝり
給へば。
世にしらぬこゝちこそすれ」有明の月のゆくゑを
空にまがへて。とかきつけおひて置給へり』一小段の第二節
之。源氏の扇をとりて。歌をかき付おきたまふ趣之見ゆるを一小段
とす。さて此段に葵上。弘徽殿の上などのことゝもいさゝか見ゆるは
上の巻々の文脈をあらはしたるまでぞ。弘徽殿のとのく
に源をねたみのたまふさまあるは。後に源の身にひの起る伏案之
おぼろ月夜も。ひさしうなりにけると。おぼせど。
若宮も心ぐるしければ。おぼしちらへんとおぼして。二条



あかぬ所なう」不足もなき之○をとこの御をしへなれば」源のをしへ給ふ故男なれたることもまじらんと之○うしろめたけれ」後めたきこゝろならずの意之○日ごろの御ものがたり」日頃内裡にての物語との物語之○わりなくはとくちをし」源をつまく慕ひまつはさ…の慕ふこゝろもあり故に例のといふ之○今はいとようならはされて」さくに紫上訓へなされて無理には源を慕ひまつはぬとい之

二小ノ第二節

院へわたりぬ。みるまゝにいとうつくしげにおひなり
て。あいぎやうづき。らうらうじきこゝろばへいとことなる。
あかぬ所なう。わが御心のまゝにをしへなさんと
おぼすにかなひぬべし。をとこの御をしへなれ
ば。すこし人なれたることやまじらんとおもふこそう
しろめたけれ。日ごろの御物がたり。御ことなどをし
へくらして出給ふを。例のとくちをしうおぼ
せど今はいとようならはされて。わりなくは志
たひまつはさず』二小段の第一節之。源二条院へ渡り給ひて。紫上と御物語などしたまふ趣之。(チヨツトモ之容易ニハ対面せぬ之)
おほいとのには。れいのふともたいめんし給はず。

つねぐと云」ものの見らびたいうよ思
しそこ〇まぶさぐりて」
まハ添てふ殺強く、
見くよとりてこ〇やい
らこのよ」僧馬楽貫
川よぬき川の流るの
やハらたまくらやハ
らのよぬる夜ハな
くておやざくるつよ
ハまして」とあり、は
僧る糸をうくひぬ
ふハ葵上のうちとけ
ぬをかこちるまこ〇
きやうざく」詩文の
秀逸のこと〇こちの
りの上を」文人楽人
そのこちく〇あき
る也左大臣みづうら
いこ〇こよとくみ

源氏つまぐ琴とよろづおぼしめぐらされて。さうの法
ことまさぐりて。やはらこのよぬる夜ハなくてとうこ
ひるふ。左大臣おしくぐこうるひて一日のけうみこしとゆ
臣孫ふ。左大臣弱こらのよまひそめ明帝こ乃法世四
代をうん又侍りぬれど。はしこびのやうよふこど源の文こ
もきやうざくよ。舞楽管絃ひごくものくねどもとこの
ほりてよこひのぶるこうん侍らざりつる。こちく
のものく上ぞどもおぼのるころほひくこそこう
志ろしめしとこの乃へさせるけるおきれも
ひどくまひ出ぬべきんちるん侍らこしとゆ

廿二号九

（ものこるふこと也」別段よこのぐりて舞ひし
笑臣ハるこしとこ〇
まして さこのゆくこ
よろこ」まして左大臣
の舞出るいぐさこの え
たるこ代の面目るる
でいと御ほやけのみ
たよなりてのものふ
〇弁中ハ」いづ臣こも
左大臣の公臣こ左中
弁しこ臣中ハこ、

三小ノ才一節

このあ月の夜」朧月
夜のこと」光よりま
こ朧月夜のことを叙
せり〇なこのれこるし
姿を」源よ臣のひ
ここ〇あこめ」長歌
息こものをひ侍

臣ものへぞ。ここよとくけへおこなふここもきべらび。源氏
たぐおほやけごとこ。廣袋志ろうなるものくこども
をまくめしこよ多づる侍ぞこなり。よろづ
のこよりい柳花苑。まこよこうぶんの例とも
なりぬべくこのこ。まこてさこのゆくこ
よ立いでさせるこらまこのぶ。世の面目めぼくこ
や侍らまこ。こゆ臣多ぞふ。弁。中ハるどま
ありあひて。かうらんよせなこ背中おこつ。や
まどうよものくねども。志らべあそせてあそ
びるふ。いとおもしろ』二小段の才二節こ。源弁中ハるここもよ勾欄

めてあるゝ〇「う月ばかり」四月之、四月頃らへハ朱雀院へ入内しのさまをさだまりてあるらしさま之〇「わりなう」俗ムシヤウ二之〇「跡はかなくハあらねど」たどるよすがの、なきハ確とせぬ事之、朧月ハ、右大臣の御女の中、と源の推しのへバ一向に志れぬにハあらねど之〇「ことにゆるし給はぬあたり」弘徽殿のあたり之弘徽殿ハ、源と御中あしければ、ことさらに用捨あるべきとのこと之〇「かゝづらはん」関係せんも之

によりみてものゝ音あはせて遊びのさま侍る。是近を二小段とし、此段を大い殿のことゝ葵上をはぢうらみの人どもの。御父左大臣どのハ源をたしとつくのふさまを、此ほか弁中将とあるを弁の中将人。といくる説もあれど、新釈などの説のめぐ二人なるをとあきらけし。弁ハ中将の事。左中弁まで若紫の巻にぶ山へまゐりてどうらの寺のましなるや。とうらひしへなるべし。中将ハ頭中将之。師云此ゑハ翔の上よりのまみりあひでといひ、どうかあとといひ。志らべあはせてといふ。此二人のとりハあらび。弁も中将も手のみの人に孫あはせ、ひるなすべし。

かのありあけの君ハ。はかなかりし夢をおぼしいでゝ。いともの嘆げかしうながめ給ふ。春宮（朱雀院之）にハ。う月ばかりとおぼしさだめ給へれば。いとわりなうおぼし（朧月之）みだれたるを。をとこ（源之）もたづねたまはんに。跡はかなくハあらねどいづれともしらで。ことにゆるし給はぬあたりにかゝづらはんも。人わろく思ひわづらひ給ふに。やよひの廿余日（はつかあまり）。右の大殿（弘徽殿の父之）のゆみのけちに。上達部（かんだちめ）みこたち多くつどへ給ひて。やがて藤のえんし給ふ。花ざかりハすぎにたるを。ほか（梅の花之）の散りなんとやをしへられたりけん。おくれてさく桜ふた（桜二木）きぞいとおもしろき。あたらしうつくり（右大臣の家之）給へる殿を。宮たちの御もぎの日。みがきしつらはれたり。はな〴〵とものし給ふと

〇「思ひわづらひ」俗シンパイ之〇「やよひ」三月之〇「ゆみのけち」けちハさま〴〵の説あれど、結（ケツ）ハ基の結（ケチ）さまなどいふ結と知れどもまで、弓の射をさめの式之二三日の弓術あるときハ手つがひの具結日といふ又終りに射る弓の手をけちを射るといふ之〇「外のちりなん」古今に「見る人もなき山ざとの桜花外のちりなん後ぞさかまし」とあるをとりて、此家にをしへられて、おそく咲たるにやとの之〇

ぞ、ぐちのほもきの四位
仏徽殿のきの女御の御
まで、源のほ姉、内裏
著のことハ、右大臣家よ
て、是より前よみ〜
さまをいふ。○おれ
おれと、俗リツパニ、
さて〜ものくやうよ
てとあるハ、女房を
よふより又〜さま
よ地よりをいふ、

三小段二節

内こ、この四位少将、右大
臣の御子の少将。○
ものやどの北方、北
方ハ右大臣のおごり
てよめる方、北ハ女房
の部、さハ部屋の
部の映あるやう
よ源よ北あるたゝ〜と

のくやうまで。なよ事もいとめこのうもて
なし孫へ。三小段の第一節。右大臣殿の方
〜殿北の宴の設け。なを〜
しく志のふさ。さて〜は宴を評釈よる。氏の業
花乃雫なる紙なる構てかゝれたるなるべ〜とあるハ。
実よ花もなる〜。そも右大臣の家よ家やとの部
しるべての色ならぶ。なるものハさらよ文をまく〜ハ」と
ある口つきまても志
くらなるどの文字あ
源氏物語

内裏ニ

源ごゝ

ザンネンニ

でよ学匠孫ひ〜
う。ものく。光業ニ
少将を。源の方へ後ま
東宮
ものやどの。
なるべての色なるべなよ

源の内裏ニ

帝ニ

帝ニ同

源ニ

夕剣ニ

源ニ

の空、上べハ志のい
つどふを志すんを
るこを下よふくめて
よめるこ。○志〜う
おほるりや」俗シス
マシガホ、ふ部の
部をほめくるを、帝
のうらゝせのふこ。○
ものうらゝせのあるを云
「右大臣よりうらゝ
と源をよびのふを、
とくまわりのこと
○女みこぐち」源の
内兄弟の姫君なるど
うみのくる仏徽殿の
内里なれど。○なべ
てのさまよ」他人の
やうハ思つまじ。
きをこ源よもよふく
〜ハ志のふなと

源氏物語講義　花乃えん　十四

あこ、さらよ文をまこ。源の内裏ニうちよおをする
孤まてう。帝ニへよそう〜孫ふ。帝ニ同志〜うこのぼな
りや。ところいせのひて。うらゝ。女みこぐちなども。お
ものやうものせよ。
ひいづる部なれバ。なべての さまよハおもふ
まじきを。志。源ニ内よそひなどひ
きたくろひ孫ひて。いうくるく。夕剣ニ源ど
よ。まこれてそうりのこ。三小段の第二
をまねきのこ。ものうらゝ。源ニ源ニ。ほどをまちて。右
大臣家ニ。ものうらゝ。仏徽殿の内さとな
れバ。右大臣家のさまを作者の注をもて。なること
なく志めさんが為め文法ニ。よく〜味ひて又べし。

内教坊のまえ、

三小ノ才三節

さくらのからのき」表白きさくらの綺裏蘇芳之○おりいとちくひきて」裾之高貴の人ほど長く引く例之○あざれたるおほぎみ君ぞ」おやれたる親王姿と之○ふのまほひもけおされて」ふハ上の方よふのまえとなるやうよ源よ内入来あそたしとの方をうけていと之、源のうつくしき姿よ勉壓てと之○とざゆ」源の姿のえもいえれぬよいと思

◎◎◎さくらのからの唐綺きれ所なほ直衣し。えび蒡深ぞめの襲下きさぎね。おりいとなぞのくひきてみる人をうへ乃袍之きぬなるよ。あざれたるおほぎみをぞのなゆめきたるまて。いみ嫌ハあれいるとあまくるほさゆ。げよいとことなり。地◎ふのまほひもけおされて。なから中ナカラなかくことざゆ」よなん。源之あそびをどいとおもろうし源ひて。夜もこ」ふけゆくほどよ。源氏のきこいうこ悩ひたるやめるさゆよもてくるひて。ちぎれこち源ひぬ」三小段の才三節ん。



ひのかよて、奥もさむるとのまえ○まぎれこちのひぬ」源ものよまぎらして、を席を立出のまえ、

三小ノ才四節

ゆ」ん殿」正殿之○女一の宮」ふ菜者よ一品宮と号ス○女二の宮」葵者よ式部卿宮ト号ス○ふ」ちいこるこのつまは」ふのふハ寝殿の屋のたまの方よ咲ふ之○袖口などふうこのをりおほ直て」踏ふの付ハだ」きぬとそ、簾の下より女房のきぬの袖を出ス之今日もくく神口ゆした源のそれ日の民装束のさまをいふ之ぞ源ハいこ」ひたるまねしてとくく立出のふハこの徒月をおえんとおほをて心なれなえ。さてはふよ。あざれたるおほぎみをぞ」ふ。ふのうらぶ者どけなきふうや。弟の袍よ指貫を着し。裾を引ハよのつまの事之。直衣よ裾をのくるぞ」ふ。ふのうらぶ者どけなきふうや。弟の袍よ指貫を着し。裾を引ハよのつまの事之。直衣よ裾をのくる出立とも いふべし。とあまてど。あざれたるとも者どけなき紀とハ。者どけなきハ。とり者ものきこえ。さて案るよ。皇子ぞ」ふ。ふべて亜下」ふこと。なるよ。ぞ」ふ。ふべて亜下」ふこと。よかきもして。そ異形を者めせるなるべし。新釈よ。皇子ぞ」ふ。ふべて臣下とこと。なれバ者のいふ之とあり。

者ん殿よ女一の宮。女三の宮ハおいこまん。ひんぞれとぐちよおもこ氏してよりあたまへり。ふぢいこなるれつまよあるこりてあれバ。所かうこぞゆあげるこしてひと

る〇ふさたくしのら
び仰今一のらびえ
〇まづ為つぼうろう
をに上の一小段水四節
よまゆこのうろう
のみさ侍ろく」とある
よ題名は蔵書つる
ろうのさまと比ふれ
ばまべて品格おとる
さ侍をいふ〇いと
いろう志ひられて」
極を強ひられたる
え〇ほまへ比ふよ奈天
玉ハ居のふねども、
右大玉の側よかく
させのえ」とろぎと
のるふえ〇のげよ」
右大玉の箱と為の
ふの箱とをこのけて
いふえ又伊勢物語よ

びといでゐるうり。袖ぐちなどふうこの丈を
りおぼ丈て。ことさらめきすていでたる
様。ふさたくしのらびとまゆ為つぼいろふりを
おぼ一ゆいらふる。なやまーきよいといろう志
ひられて。へいこうびまて侍り。恐入レドモこけれど式
右大玉のえ
ばまへよろそはこのげまるかくさ世給をめと
てつまどのうろ丈紙。引かつまるうえ
ひき紙のるへ。女房用
ぐあれろぐ
メイワク
らたくしよのうらぬ人こそやんごとなきゆう
りはかうちは侍るなれといふれ紙ヤウス紙
のるふよ。おも女の人ぐうえ
ぐしうはあらねどおーるべての



業平中将この為氏のさ
ふの丈をよまれたる哭
人をおほミ方をーよ
おさる為のこのげの函
のおれ丈をりよかま
てかけるりやそふ
次よりまのうらぬ人を
ニ」といふを考今
べー〇よのうらぬ人と
函志ぬぜ侍のすの
ろそ所縁を託ち結
里源のほ多ふまそか
やうのことのすの
れ、と女房だちのう丈
〇ふうくおくまり
たる為つぼうろう
ぐどの用をふのき
を云え〇やむごと
なきほうぐ」炎き

若女え
ぐどのうどぐらもまあらびあてよをこのき
ウツクシキ　畑
けをひ志るーそらだき物いとけぶろうく
焼香え
薫え
ゆりてきぬれおとるひいとをたやこのよく
ハデヤカ
ちふるよひるーてんまくくおくまりたる
けをひハ。為ちおくれいまめこのれことを
尚ほ乱え
このをたるうたりまてやむごとなきほあ
ろぐ物ろ給ふとてこのとぐちハ志めぬ
戸口え　占領え
るなるべーさらあるまれとなるまど
えくまきあるべきことなれどえ
さをぐよをこのーうおぼされていつまるら
ヲモシロウ　源ゐん　この御月ハ
んとむねうちつぶれて。扇をとられてこのき

くく。皇女ならさ大臣のかの方は女など。○扇をとられて「引」なし僕る所に石河のこまうどに帯をとられてからきくいなる」にどハ高麗人之、帯とあるを扇とうつしうへのすそ之、ゆるどのむる人やあらん、とこの事を知らん計略く○おほどけとりしまりなきさは之、おほやうのさ之○さはうへたる」やうかたりたるさ之扇をとられてとうさひなふおはあやしむさ○あづさ弓の

めで給ふ。みなとうちおほどけたるこゑにいひなして、よりゐ給へり。あやしくもさまかへたるこまうどかなといらふるハ、心しらぬにやあらん。いらへはせで、ただときどきうちなげくけはひするかたによりかかりて、几帳ごしに手をとらへて。

あづさ弓いるさの山にまどふかなほの見し月のかげや見ゆると◎なにゆゑかとおしあてにのたまふを、え忍ばぬなるべし。

心いるかたならませば弓はりの月なき





『今日ハ弓の結の日なれバ、梓弓入さの山といひかけ、ほのみし月ハ有明の細殿のことを思ひ出したるなり。さハ月を女君によせて。源のおもとめ給ふをいふ也。○なにゆゑか『トウシテ』なれ知らぬおぼつかなき人なるにまどふぞとの意。○心いるの意』此方上の空なけていふ也。月なき空ハ、着なききをかけていへり。空ハ若し定めんに入りたる方ならバ。君にまどひマシヤウカイ、ほどひ

そらにまよはましやはといふこゑたゞそれなり。いとうれしきものから』

三小段の第四節之。源寝殿の戸口によりて。彼の朧月夜の君をもとめ給ふ状之。花宴を三小段とし此段を右の大殿の弓結の日夜宴の宴のことを叙せり。結尾に源と朧月夜とまた廿日余ハ。この榊の巻の伏案之此巻の結尾のことハ。旧注などにもさまざまに論ひたれど。あやまれりともおぼゆ。さて思ふに。此巻を「うれしきものから」まで結びたるハ。作者のふかきこと源もうれしきものからあら。さきごゑにはいかでか女房達。あまたこゑのあるにまふあり。こととに右大臣家へハ。始てこころ弱ふをなれど。口をしとはおぼせど。せんかたなくてやむのふさぎ給ふくめて。帯をとめしなるべし。さまでぞかのものいひそれぞれなん」などいふこそ残そへてあるべし○以上桐壺の巻より此巻にいたる迄ハ。桐壺帝の御宇にして。凡十九年間の事をしるしたり。此物語の全部を五大段に大別するうち第一大段と知るべし。次の葵の巻よりハ御世かはりて。朱雀院の御宇也

八ちのみやまごとゝ、事どもなり。なほくふしくハを書よ於ていの爲し。

花宴の巻終



明治十七年五月五日版權免許

校閲者　東京府平民　黒川真頼　東京浅草区小島町二十八番地

講義者　東京府士族　鈴木弘恭　同小石川区竹早町十三番地

筆記者　三重県士族　小杉隆　同同区久堅町百二十二番地

出板者　東京府平民　桜河梅次郎　同日本橋区本町二丁目十番地